学習者の省察を促進するファシリテーションについての研究
－プロジェクトアドベンチャーを題材にして－

専　　攻　人間発達教育専攻
コ ー ス　教育コミュニケーション
学籍番号　M 1 3 0 0 3 I
氏　　名　小 俣　　直 由 樹

１．問題と目的

変化の激しい現代において我々は身に付けた知識だけで新しい事柄に対応することが難しくなった。そこで必要とされるのは、知識習得に偏らない、学習者が自ら考え、自ら問題を解決していく資質である。自ら考えるには、学習者が学習素材を知識構造に導入する際に、学習者の内的体験(これまでの体験の蓄積)と学習素材(外的体験)を照合し、合致しなければ、学習素材の情報から内的体験を変化させた後に、学習素材を知識構造に取り込むことが必要になる。この知識構造への接近を深層アプローチと言う。深層アプローチでは、新しい内的体験が生成されるので、学習者の準拠枠が変化し、省察が起きる。このような省察を促進する教育が今日必要とされている。

省察を促進する学習の一つに体験学習がある。単なる自然体験ではなく、指導者が学習者に体験を通して省察を促進する教育である。その一形態はワークショップ(WS)と呼ばれ、WS の一つにプロジェクトアドベンチャー(PA)がある。PA は小グループで学ぶ構成化されたプログラムである。

PA の観察によって、学習者の変容と指導者(ファシリテーター:FTR)による指導(ファシリテーション:FTN)との関係を明らかにし、学習者の省察にとって有用な FTN の特徴を明らかにする。以上を本研究の目的とする。

２．方法

(1)調査対象：兵庫冒険プロジェクト(HAP)及び冒険教育研究会の参加者(合計 137 名、男 73 名、女 64 名、12～54 歳)、FTR(合計 6 名、男 6 名、22～54 歳)。

(2)調査時期：2014 年 4 月～2014 年 6 月

(3)調査内容：PA の WS を 11 事例扱った。参加者には WS 終了時に質問紙調査と感想文を書かせた。質問紙は PM 理論に基づくリーダーシップ評価で、FTN 評価をさせた。FTR には WS 前後にインタビューを行い、事前計画と事後反省感想を聞いた。事後に、質問紙で FTN の自己評価をさせた。WS の観察記録は筆記とした。

(4)調査後の手順：参加者感想文を Moon(2004)の省察度評価に基づき評価し、「感想文省察度」とした。観察記録から FTR のやりとりを考察した。更に各事例の感想文省察度平均の高中低程度となる 3 事例を取り出し、FTN について比較検討をした。

３．結果と考察

(1)「参加者による FTN 評価のうち、リーダーシップ評価(M 得点、PM 得点)が高くなるにつれて参加者の感想文省察度が高くなる」

参加者による FTN 評価のうち、集団の維持機能である M 得点とそれに目標遂行機能である P 得点を加えた PM 得点が高かった参加者の感想文省察度が高かった。このことは、高いリーダーシップ(特に M 機能)を受けたと感じた参加者が省察を進めたということを表している。M 機能は情緒満足・人間関係の調整・緊張解消なので、それが FTN のスキルとして重要で、安心できる環境の下で省察が進みやすいものと考えられる。(※以下、参加者と学習者は同じ意味で扱う。)

(2) 学習者の省察の促進に有用な FTN スキル(1)「有意味・不完全構造学習課題を提供した」

①有意味学習素材を提供した。学習素材が実質性と非恣意性を持ち、学習者が学習素材に込め

られた意味を掴むことで、洞察が行われる。意味を理解するには、学習者は内的体験にアプローチし、アプローチしていることも認知し、メタ視点から自身を捉える。

②不完全構造的な学習素材を提供した。この学習素材に対して、学習者は目標を自ら決定する。課題解決の過程で、自らの可能なこと、不可能なことを自己に問いただし、メタ視点で自身を捉え、省察的に解決方法を見いだしていく。振り返りで省察はより確実になる。また、ルール設定と目標レベルを学習者自身が決定することで、課題は難しすぎず、易しすぎない程よい挑戦レベルとなり、学習者は自己目的的活動を行い、上手く進むとフロー状態になる。その後、振り返りを経て、プロセスへの焦点化が進む。

(3)学習者の省察の促進に有用な FTN スキル(2)

「WS 実施中に見られた FTN スキル」

①学習者中心の目標設定②FTR による自己開示③参加者同士の話合いの場④参加者のマチュリティ(成熟度)に応じて FTR による評価と参加者による評価を選択⑤参加者の感情表現と発言を観察⑥目的にあった適切な介入(フィードバック・質問)と非介入⑦概念の言語化(日誌筆記)

(4)学習者の省察の促進に有用な FTN スキル(3)

「学習者のマチュリティ向上のために、FTR はリーダーシップ行動を変えて行った」

FTR は指示的行動・協労的行動を増減させて、学習者のマチュリティを向上させた。それは、以下①～④の手順であった。

①WS 初期には高指示低共労的指導をし、学習者を学習素材に専心させる。②指示を減らし、学習素材に取り組むようなら、共労を増やす(学習者は FTR から認められ評価される)。するとマチュリティが向上して中程度になっていく。③更に指示を減らし、学習者が主体的に学習素材に取り組むなら、共労を減らす(FTR は評価をしなくなる)。自己評価によって学習者のマチュリティは向上する。④更に指示を減らすと、学習者は自身の行動を管理し、評価も自身で行うようになっていく。共労も必要なくなる。

学習者のマチュリティが向上し、③④の状態で振り返りを行うと、学習者はプロセスと自己に焦点化した。振り返りでは、学習者の感情に焦点化すると、プロセスへの焦点化が起こりやすく、学習者はメタ視点で自身を捉え、深層アプローチを開始した。

FTR は、実際の行動以外で、不完全構造的な学習素材の提供によっても指示的行動を減らすことができた。

(5) 学習者の省察の促進に有用な FTN スキル(4)

「学習者、学習素材、FTR からなる構図を転換した」

(3)(4)のスキルを使って、FTR は(FTR-学習素材-学習者)から、(学習者-学習素材-学習者)の構図への転換を図り、学習者が主体的に学習素材に専心する構図を作った。振り返りで、(FTR-学習者)の構図から、(学習者-学習者)の構図へ転換を図り、話合いを促進する。学習者が語った言葉が自己に向けられた。

４．総合考察

PA を題材に、学習者の省察を促進するための①学習素材②FTN スキル③リーダーシップ行動④構図変化を捉えることができた。

これらの知見を基にして、構成化された学校教育の場面で、例えば特別活動・総合的な学習の時間等で体験的な学習を行う際に、そのままもしくは適度に応用して、学習者の省察力を高める指導が可能だろう。教科学習においても、応用することによって、学習者の省察を促進できるものと期待される。

主任指導教員　中間玲子
指 導 教 員　中間玲子